

「日本音楽学会国際奨励金」報告書

岡野宏（東日本支部）

「発表学会について」

報告者は2012年11月13日から15日にかけてソウル国立大学校において開催された「東京大学大学院総合文化研究科とソウル大学校音楽大学の大学院生のための音楽学日韓交流セミナー」に参加し、13日に行われたセミナー参加者内での発表とディスカッションおよび15日のオープン・プレゼンテーションにおいて発表を行った。

本セミナーは東京大学大学院総合文化研究科とソウル大学校西洋音楽研究所が共同して2011年から毎年開催しているセミナーであり、両大学で交互に開催することになっている。本年(2013年)には東京大学駒場キャンパスで8月末ごろ開催される予定とのことである。日韓の音楽学生の交流を目的として開催される本セミナーでは、すべてのコミュニケーションが英語で行われる。参加学生は基本的には両大学に属する大学院生で構成されるが、かならずしもそれに限定されることはない。本年は日本側から5名の学生（韓国側からは7名）が参加したが、このなかには東京芸術大学所属の院生も含まれている。

例年セミナーでは、一定のトピックが定められ、各学生はそれに沿ったかたちで発表を行うことが求められる。2012年のセミナーでは *Musical Production, Performance, Research and Aesthetics in Modern Korea and Japan* というトピックが掲げられた。参加者は事前に発表用の原稿を作成し、本番数週間まえに提出し、また他の参加者が提出した原稿に目を通しておかななくてはならない。それぞれの学生が扱う題材はかなり多岐にわたっており、ディスカッションを有意義にするためにも、こうした措置は妥当なものであろう。

「研究発表要旨」

報告者は13日、15日とも「18世紀半ばのヨーロッパにおける感情と音楽の関係 ―とりわけ「共感」について」というタイトルで発表を行った。基本的に内容は両日とも変わらない。美学的かつ観念史的研究であるが、今回は音楽プロパーの文献ではなく、おもに同時代の小説や哲学書等を参照した。以下、要旨を記す。

本発表では、18世紀半ばヨーロッパにおける「感情の理論」と、それに対して音楽もしくは音が持っていた意味合いの考察が行われる。今回はとりわけ「共感」というトピックをとりあげ、哲学書や小説などを参考にすることで、同時代の人々がいかに「共感」というものを重視し、なおかつそこで「共感」という観念がイメージされるときに、「音楽」や「音」の観念がある機能を持っていることを探った。

西洋において伝統的に「感情」は「理性」と対比され、その不合理性が強調されてきた。こうした状況は17世紀に変化がみられはじめる（スピノザやパスカルなど）が、より決定的な変化は18世紀におこった。ハバーマスが主張したように、この時代に外部から隔絶された「内面」が確立され、人々は自らの内面世界に着目するようになった。こうした状況

の中で、人間が本性的に有しているものとしての感情がクローズアップされることとなる。ジャンルとしての小説の勃興はこうした状況を反映している。

伝統的に感情は不合理であり、しばしば反社会的なものとなってきたが、こうした考えも変化することとなる。その時重要なトピックとなるのが「共感」である。たとえばヒューム、アダム・スミスといった英国の道徳哲学者たちは道徳の確立の根底に他者への共感を置いた。また、ロレンス・スターンやルソーなどの小説作品にもしばしば「共感」が物語や人間関係を動かすさまが描かれ、大きく「センチメンタリズム」と呼ばれるような潮流を形作っていくことになる。

報告者はこのようにして執筆された哲学書や小説作品において「共感」がイメージされるとき、そこに「音声」「協和音」「共鳴」などのメタファーが作用していることを見出した。具体的にはスミス『道徳感情論』、ルソー『告白』、ゲーテ『若きウェルテルの悩み』が参照される。このうえで、その背景として音楽における「協和性」の観念の変化が存在するのではないかと考えた。すなわち「単純な数比」としてのそれから「要素の一致」としてのそれへの移行である。「要素の一致」のイメージが「心情の一致」つまり「共感」のイメージへと変換されるのである。

「質疑、反響と感想」

概略以上のような発表にたいして、13日の発表では、次のような質疑が行われた。なお、15日には質疑応答の時間は設けられなかった。まず第一に研究動機が問われた。この発表は報告者自身のよりおおきな研究テーマに基づくものであったが、たしかにその背景の説明がおろそかになってしまったことは否めない。この点は15日のオープン・プレゼンテーションにおいてやや膨らませて話すことができたので、多少改善されたかと思う。

次にスザンヌ・ランガーによる一連の音楽的記号学を参照するべきではという提案がなされた。ランガーの著作に対する評価は報告者が有していたものとやや異なるものであったが、あらためて読み直してみようという動機は与えていただいた。

全く予想外であったのが、ある韓国側参加者からの、報告者のみいだした共感の対象および媒体としての「音声」はジャック・ラカンの思想によって説明可能なのではないかという提案であった。発表当時、報告者はラカンの思想について全く不案内であったので、ほとんど満足な受け答えはできなかったが、その後、自分なりにラカン思想を検討してみようと考えた。

全体的に論点が散漫な発表となってしまったこともあり、報告者の印象としてはそれほど興味を持って聞いていただけたという感じはなかったが、いくつかいただいた質問は有意義なものだったと思う。おそらく日本の音楽学会で同種の発表を行っても、ラカンは話題にのぼらないであろう。両国の学会の雰囲気の違いがこの「驚き」をもたらしている可能性はあり、その意味では国際的なセミナーに参加したことの効力であるといえるだろう。むしろ報告者は韓国の学会に属しているわけではないので、その性格については想像のか

ぎりしかないのはいうまでもない。

以下、いくつか感じたことを書く。外国語による研究発表はやはり母国語によるそれより困難が多いものである。特に冒頭でなされるだろう問題意識の説明など、やや議論が抽象的になりがちな場面では、国内学会で日本語で発表する以上に丁寧に説明する必要があると感じた。とはいえ、そうした試行錯誤を行うことで、自分が何に問題意識を持っているのかがより鮮明に表れてくるし、またそれを明確に他者に伝える技術も磨かれてくるだろう。その意味では、外国語による発表は意義のあるものといえる。

また、他国の人々がどのような問題に関心を持っているのか知ることができるのは単純に新鮮な体験といえるだろう。韓国側の参加者からはバフチン、アドルノといった思想家やリディア・ゲアやロレンス・クレイマーらの議論を参照する発表があり、国内学会とは異なった雰囲気を楽しむことができた。

以上で私の報告を終わる。最後になるが、資金援助を通じて、このような機会を与えていただいたことに感謝したい。